

いの流水俳壇

友草 水月選

「当季雑詠」

ゆく年や叫びつづけてムンクの絵

伊藤 萩甫

(評)暮も押し詰まつてきた。ムンクの絵は男が(口を大きく開けて)叫びつづけている絵を見て詠んだもので何と叫んでいるのであるうか。

ムンクはノルウェー画家で表現法の先覚者と言われ、好んで病氣と死をテーマにしたそうである。絵は暗い背景に一人の男が口をいっぱい開けて叫んでいる。死の直前の叫びか、病苦の叫びか、一目で深く印象に残る絵である。掲句のゆく年とムンクの叫びの絵との構成はすばらしい。

○ゆく年の硯を洗ふ厨かな

三好 達治

金色の風遊ばせて棟の実

津田 久美

(評)棟とは「梅檀」とも言い「樗」とも書く。棟は初夏にうす紫の小花をつける。私の母校神谷小学校の庭には、町の文化財に指定されている樹齢二百年の棟があり、白花で珍しいとされている。この句は、冬になると葉は全部落ち、鈴なりの実が金色に光り輝いて風に揺れている美しさを詠んでいる。風遊ばせの表現が見事である。

○城趾去る梅檀の実の坂下りて

星野 立子

あれを終えこれを済せて年用意

大川 節弥

(評)暮も押し詰まつて何となく気忙しい毎日である。年用意とは新年を迎えるために家の中の整理、普段手の届かない押し入れや、便所、風呂場などの掃除、庭や外回りの片づけ、そして年賀状書きなどと正月用品の買物と多忙である。作者は既に、あれもこれも済まして新しい年を迎える準備ができている。手際の良さは羨ましい限りである。

○夕映の妻にしたがう年用意

笹川 正明

枯葉積む過ぎにし風の遊び谷

岡村 嘉夫

(評)木枯しが吹く季節になった。今年は特に偏西風の低気圧が次々と日本列島を通過し強風が毎日の如く吹いた。特に谷合いは落葉が風に舞い、吹き溜りとなって積んでいるのである。作者は落葉の舞う谷合いを風の遊び谷と詠み、落葉を残して風は去っていったと言っている。木枯しの吹く季節の自然現象をよく捉えている句である。

○降りつめば枯葉も心温もらす

鈴木真砂女

二句抄

短日や犬や猫も急ぎ足

森岡 照月

残り柿仲良し小鳥宴かな

竹崎たかひろ

秘密保護知って知らず紅葉散る

間 浩太

雨が好き独りが好きと蝸牛

井上 郁子

野球の子いづれの冬の灯に帰る

竹崎 光子

空っぽの頭となりて柚子搾る

川村 博子

成り行きに委す速知り日向ぼこ

古暦記憶をうなぐメモのあと

ボケットの木の実廻る洗濯機

天涯に独りの自由大根炊く
戒名の母の歳越す木の葉髪
頂き煮物勤労感謝の日
深呼吸小春の空へ思い切り
吊し柿五線譜に写り楽しけり
孫という心の宝七五三
忙しさに歯止のきかぬ師走かな
仕合せを独り占めたる日向ぼこ
浅学の一字に迷う寒夜かな
木の葉髪亡き人の文読み返す
いろいろありて今年の古暦
精検日年越しとなり悩み伸ぶ
転びなよ妻の口癖年の暮
木の形岩のかたち高紅葉

名句鑑賞

水月

海暮れて鴨の声ほのかに白し
一望の冬の海が次第に黄昏でやがて青が広がる。浜辺は波の寄せる音が静かにくり返されるばかり。独り佇つ芭蕉の耳に鴨の鳴く声がほのかに聞こえた。声に色はないはずだが色の状態を言っている。海はいよいよ暗くなつてゆく。浜辺の変化もほのかに白しで寂寥感を強める。この句は、五、五、七の破調である「ほのかに白し鴨の声」とまとめず「鴨の声ほのかに白し」と余韻を残している。鴨も旅寝、われもまた旅寝、芭蕉の心に共鳴する。

次題 「当季雑詠」五句

締め切り 毎月五日

投句先

社会教育課

〒893-1201 2

有料広告

医療法人 森木病院
光生会

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL (088) 893-0014

内科
外科
小児科
循環器内科
消化器内科
リハビリテーション科
人工透析